

花火大会は“花火仕掛人”にとつては晴れの舞台である。といつても主役は花火であり、花火仕掛人はあくまでも舞台には出ない演出者であり、裏方である。その演出ぶりや舞台裏での仕事ぶりで花火の出来、不出来がきまるといつてよく、苦勞は多いが、観衆が花火に酔つてくださればくださるほど、その苦勞も忘れるというものである。

花火大会は時間にすればせいぜい一、二時間だが、そこにこぎつけるまで結構手間がかかる。まず主催者側との打ち合わせが三か月前くらいから始まり、契約書が取り交わされたところで打揚げ許可申請の手続きを都道府県知事に行ない、大会の準備にかかる。

まずプログラム作成。ただ花火をやみくもに打揚げるだけではせっかくの花火の饗宴も音と光が交錯するだけで印象の浅いものになってしまうので、盛り上がるのタイミングをはかるプログラムが大切なのである。このプログラムづくりの基本として、同一種類の玉やスターマインを連続して揚げないようにしている。これは花火が画的になることをさけ、観客が次の花火を期待する気持ちより高める効果をねらつたものである。ポカ玉を揚げたら次は小玉や中玉を揚げ、ややだれ気味のときには思わぬ方向から華麗なスターマインを打揚げて人びとの度肝を抜き、あるいは赤、青、黄、銀、白などの色も効果的に取り合わせるよう努めている。

また、煙火玉が打揚げられてただシウルシウルと昇つていくだけでは興味が少ないので、上昇中に白光の尾を引いたり、鋭い金属音を響かせたり、あるいはいくつもの小玉がパツパツと花を開かせたり、いわゆる「曲」をつけた花火を折り混ぜることもしており、ふつう全体の四〇〜五〇パーセントがこの曲付きである。そして八ライトは、ナイヤガラを中心とする仕掛花火。この間は打揚げ花火は中断して観衆の目をそこに集中させる。そして仕掛花火が終わりに近づくと、裏打ちと称してス

ターマインを打揚げて、仕掛花火の消滅間ぎわの淋しさをカバーするのである。

いよいよ終幕に近づくと、大玉を威勢よくポンポンと揚げ、大空に大輪の花を盛んに咲かせる。そしてその映像が消えやらぬ間に、数百発のスターマインをいつせいに打揚げて花火大会の興奮をいっきに盛り上げる。フィナーレは三段雷、五段雷、あるいは万雷の連発、これで見客に終了を知らせるわけである。

プログラムが出来上がると、次は細かいタイムスケジュールづくりと打揚げ玉や仕掛花火の用意である。玉は打揚げ現場で筒に入れる方法と、工場であらかじめ筒に仕込んでおく方法とがあるが、一万発近い玉を揚げるような大きな大会では、筒にあらかじめ入れておく方法でないと時間的に間に合わない。

そして大会当日。大型トラック二台に筒に入れた打揚げ玉や仕掛花火類を、もう二台に小道具類や防火用具と氷の山を積み込む。氷とは場違いな感じをもたれる向きもあるが、これは飲み水用である。打揚げ場所はだいたい人家や各施設から遠く離れているのが普通だし、大会は夏が多く、汗まみれになって緊張した仕事が続くので、何よりもこの冷たい水がありがたいのである。

トラック四台、打揚げ従事者を乗せたマイクロボスの“花火車両”行列が現場に着くとただちに作業開始。打揚げ筒の設置では延焼防止のために落葉を払い枯れ草を刈り、筒の周囲に水を打って湿らせ、そこが山林の場合にはとくにお願ひして消防署に付近に散水してもらつたりする。仕掛け花火の枠組みなどもあつて、大会現場はそれこそネコの手も借りたい忙しさである。準備が整つたところで監督官庁の担当者や消防署員の検査が始まる。許可申請書の届け出内容と違つていないかどうかの検査で、微細ななかなきびしいものである。

いよいよ打揚げ開始間近。各持ち場に散つた担当者から携帯無線機や仮設電話などで「準備よし」の報告が監

督者に寄せられる。黒玉の警戒要員も要所、要所に配置されている。大会開催の合図は五段雷、三段雷などの信号雷である。この合図を待ちかねたように「ドッーン」「シユルシユル」と絶え間なく揚がる花火。大空に精魂傾けた火の花が開いていくが、觀賞している暇はない。ただ玉の行方を見つめて点火したか点火しないで黒玉になつたかどうかを確認するのが精一杯である。とくに危険な仕事はスターマインの打揚げで、同じ場所から同時に数十発、数百発の玉が揚がっていくので、打揚げ者は全身に火の粉を浴びる。その火の粉が次のスターマインのセットにかぶせたシートの上にも降り注ぐので、竹ぼうきで払いのけたり、地面で燃える残さいを消火したりしなければならぬ。

花火大会が終わると、だれもかれも顔はすすで薄汚れてその仕事ぶりをしのばせる。だがホツとする暇もなく次は撤収作業。準備のときの三分の一の時間ですむが、それでも帰社できるのは午前零時をとくに過ぎた時刻である。そして翌朝再び現場に戻って、昨晚の暗がりですりすまされなかつた現場付近の整理と黒玉の搜索をする。黒玉が一つでも残っていると危険なので、山林などの中でも徹底的に行なうことになっている。

わずか一、二時間の饗宴のために、費やされる費用と労力は莫大なものである。それでも人びとは花火を求め、花火師は花火づくりを止めない。とくに一年三百六十五日を花火づくり、花火大会のために過ごす花火師にとつてその一日一日が生き甲斐につながっているからである。